

1. 研究者になろうとしたきっかけ

胎盤ホルモンの値の組み合わせで胎状奇胎に続発する侵入奇胎と絨毛癌の鑑別を行う研究を行ったこと。若い女性の子宮頸がんの予後が悪いことを実際に経験したこと。

2. 助成研究の紹介

子宮頸がん検診受診率はわずか 30-40%です。理由は心理的、時間的、地理的な制約です。子宮頸がんのほとんどがヒトパピローマウイルス(HPV)によるものです。自己採取検体での細胞診は不適切ですが HPV 検査は感度が高く医師が行うのと同じ精度が得られます。そこで検診未受診者に自己採取 HPV 検査を受けて頂く研究を江別市と共同で進めています。HPV 陽性であれば細胞診を行い精密検査の可否を判定します。

3. 前年度からの研究の進捗状況

2014、2016、2017 年度の検討で検査希望率は 10%程度ですが年々少しずつ増加傾向にあります。HPV 陽性率は 12%で、その 60-70%に細胞診異常があり、前がん病変の発見・治療に結びつきました。さらに多くの市民に検査を受けてもらえるように RFLJ「プロジェクト未来」助成により子宮頸がん自己採取 HPV 検査をテーマにイベントを江別市で開催しました。

4. 全国の RFL 関係者に一言

疾病対策は予防 prevention、予測 prediction、個別化 personalization、参加 participation であると提唱されています。子宮頸がんについて言えば、原因である HPV に対する予防策を講じ、HPV 感染には HPV ジェノタイプや細胞診で進展を予測し、受診者の立場を尊重した受けやすいがん検診方法を開発し、市民と医療従事者が啓発・教育を通して予防と早期発見に結びつけること全ての対策ができます。その中で自己採取 HPV 検査は女性の価値観や立場を考慮した有望な方法と考えられます。